

2010年度 SCAN 発表論文

「地域づくりと住民の学習」

～北海道置戸町を事例に～

北海道教育大学釧路校
社会教育研究室(添田ゼミ)

菅原信

早坂未知子

南隼人

三浦千乃

八鍬強太

李沐子

2010年12月

論文概要

近年、地方の市町村において、過疎化や高齢化が問題となっている。北海道においては、極めて厳しい状況である。こうした切実な地域課題を解決するためにどのような取り組みが有効であるのかという疑問が生じた。しかしながら、過疎化や高齢化を地域課題としている地域において、劇的な経済発展や人口増加などの変化を巻き起こすことは困難であると考えられる。まずは、地域内住民や他地域の人々との交流や活発な地域活動を促進することに重点を置き、自己の地域への愛着や誇りを創出する。その過程において、住民が地域を見つめ直し、学習することによって、地域のアイデンティティを再発見し、それを中心とした内発的な発展を促進することで、持続可能な地域づくりを目指すことが重要である。本報告の目的は、上記について「住民の学習」という視点に立ち、事例を基に検討することである。

本報告に位置づけとしては、活発な地域づくりの在り方を、持続可能性の観点で捉え、住民の学習を基軸とした社会教育活動の展開を中心に考察した点が、今までにない試みといえるのではないだろうか。

今回、この疑問を研究するにあたり、自治体の町づくり政策や社会教育活動ができる取り組みとはどのようなものかを、関連する文献や論文をもとに情報を収集する中で、北海道置戸町の注目すべき取り組みに出会った。置戸町では社会教育を通じて「生産教育」¹⁾に取り組んできた。置戸町では住民の活動が活発に行われており、公民館法制定以前から公民館を設置し、活動を展開してきた。それを支えてきたのが公民館や図書館などの社会教育施設であり、公民館は住民に活動の場を与え、図書館は情報の提供を行ってきた。

「生産教育」を取り入れ、地域を見直そうと動き出して数年、木工工芸品「オケクラフト」が誕生したことで町に活気が生まれる。オケクラフトを切り口に様々な名産品が誕生し、他の資源の見直しにもつながる。

置戸町は活気ある地域づくりをしていく上で内発的な発展により、活気のある地域づくりを目指してきており、この事例は他の地域にも適用できると考察した。その要因として

- 1、人づくり
- 2、専門性のある職員の配置
- 3、行政の支援
- 4、外部とのつながり

の4点を挙げた。

これらを円滑に機能させることで、持続可能な地域づくりが行えるのではないかと考察した。

論文目次

I はじめに

I-I 問題の所在

I-II 調査方法

II 置戸町の概要

III 調査結果

III-I 置戸町の社会教育

III-II オケクラフトの誕生経緯

III-III ひろがる学びの連鎖

IV 考察

IV-I 置戸町における地域づくりと住民の学習

IV-II 提言

参考文献

I はじめに

I-I 問題の所在

近年、地方の市町村において、過疎化や高齢化が問題となっている。北海道においては、極めて厳しい状況である。こうした切実な地域課題を解決するためにどのような取り組みが有効であるのかという疑問が生じた。しかしながら、過疎化や高齢化を地域課題としている地域において、劇的な経済発展や人口増加などの変化を巻き起こすことは困難であると考えられる。まずは、地域内住民や他地域の人々との交流や活発な地域活動を促進することに重点を置き、自己の地域への愛着や誇りを創出する。その過程において、住民が地域を見つめ直し、学習することによって、地域のアイデンティティを再発見し、それを中心とした内発的な発展を促進することで、持続可能な地域づくりを目指すことが重要である。本報告の目的は、上記について「住民の学習」という視点に立ち、事例を基に検討することである。

本報告に位置づけとしては、活発な地域づくりの在り方を、持続可能性の観点で捉え、住民の学習を基軸とした社会教育活動の展開を中心に考察した点が、今までにない試みといえるのではないだろうか。

今回、この疑問を研究するにあたり、自治体の町づくり政策や社会教育活動ができる取り組みとはどのようなものかを、関連する文献や論文をもとに情報を収集する中で、北海道置戸町の注目すべき取り組みに出会った。置戸町では、公民館や図書館を中心に展開する様々な社会教育活動が広く行われている。また、住民の参加意識も非常に高く、首長部局もそれらの活動を積極的に後押ししているため、活発な地域づくりにつながっていると考えられる。

今回、私達は上記の疑問を研究するにあたり、社会教育を通じて「生産教育」¹⁾に取り組んできた、北海道置戸町を調査対象に据えた。木工工芸品である「オケクラフト」を切り口に、その誕生の歴史的背景や置戸町での社会教育の実践、公民館などの施設が担った役割を明らかにした。そして、それらが生み出した町全体の活性化や活発な地域づくりとの関連を、内発的発展論を参照しつつ、考察した。現地での調査の結果をもとに、置戸町のまちづくりにおいて、社会教育が住民に与えた影響や目標の到達点を明らかにしつつ、過疎化・高齢化の中でも、特色と活気のある地域づくりの在り方を提言する。

I-II 調査方法

1) 訪問調査

第1回訪問調査：2010年10月29日、第2回訪問調査：2010年11月28日

2) 調査内容

①関係者へのインタビュー

社会教育課長、生涯学習情報センター（図書館）長、クラフトマン（職人）

②施設視察

中央公民館、生涯学習情報センター（図書館）、森林工芸館、どま工房、旧置戸駅

③文献調査

矢崎秀人「1950年代における置戸町の社会教育：置戸町初期公民館」

井上久男「木と暮らす、クラフトの里作りを目指して～北海道常呂郡置戸町～

森田はるみ「地域課題に挑戦する公民館・図書館～北海道置戸町の場合」

岸田純一「まちの暮らしに役立つ図書館―北海道・置戸町の場合―」

他

II 置戸町の概要



置戸町は、北海道大雪山の東端に位置する林業と農業で発展してきた町である。1911年に国鉄網走本線が開通して置戸町にも多くの人が入ってくるようになった。豊富な森林資源が注目され、当時から置戸町は林業によって発展してきたといえる。1915年4月1日に野付牛村より分村し、置戸村が誕生した。置戸町の名称は、アイヌ語のオケトウンナイ（鹿の皮を干す場所の意）を取ったものである。町の総面積 527.54 平方キ

ロメートルのうち、8割以上が森林で占められ、一級河川の常呂川が町を貫流している。上流には鹿ノ子ダムがあり、山間におけると湖がたたずんでいる。1954年に台風15号（洞爺丸台風）が北海道を襲い、置戸町では大規模な風倒木が発生した。その処理のために多くの人が入置戸町に入った。1958年には人口が13,000人を超えたが、その後風倒木処理が落ち着き、また農業構造改革事業などが進むと、次第に人口が減少し、過疎の町の様相をおびることとなった。

現在は人口およそ 3,500 人の小さな町となっている。図 1 は置戸町の人口と世帯数の推移を示しているが、人口の減少に比例して世帯数も減少傾向にあることがわかり、現在もその傾向は続いていると予想される。また、表 1 を見てもわかるように、人口における高齢化率が男性、女性ともに 30 パーセントを超えている。さらには鉄道路線の廃線など、置戸町を取り巻く社会環境も厳しくなっている。こうした中で、置戸町は「まちづくりは人づくり」を理念とし、4 本館 8 分館という公民館体制の構築や、いち早く専門職の社会教育主事を各館に配置するなど、公民館を中心とした地域づくりを行ってきた。

図 1 置戸町の人口と世帯数の推移

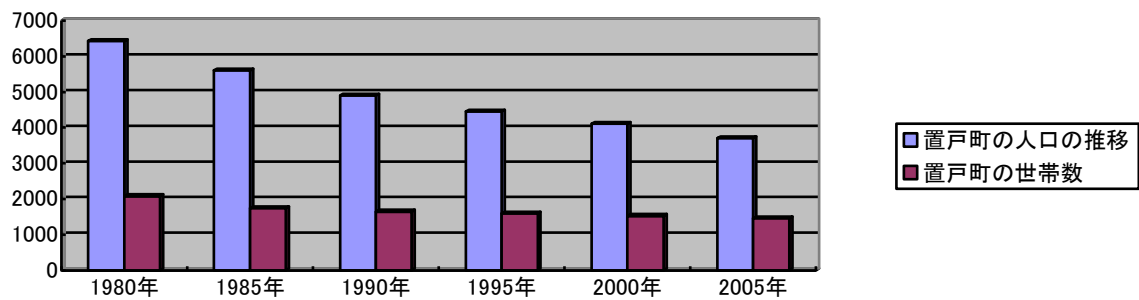


表 1 置戸町の人口の詳細 (2005 年国勢調査)

男性	1,732 人	女性	1,967 人	計	3,699 人
少子 (男)	202 人	少子 (女)	173 人	少子 (計)	375 人
少子率 (男)	11.66 %	少子率 (女)	8.79 %	少子率 (計)	10.86 %
高齢者 (男)	558 人	高齢者 (女)	703 人	高齢者 (計)	1,261 人
高齢化率 (男)	32.21 %	高齢化率 (女)	35.73 %	高齢化率 (計)	33.84 %

Ⅲ 調査結果

Ⅲ-Ⅰ 置戸町の社会教育

(1) まちづくりは人づくり

置戸町の社会教育は「まちづくりは人づくり」の理念のもと、公民館を中心に活動が進められてきた。置戸町（当時置戸村）の公民館が誕生したのは、社会教育法公布前の1949年1月である。そのきっかけとなったのは青年読書会の本の貸出活動であり、公民館に図書室を設置したことが図書館活動にもつながっていく。

初期の公民館は「寺中構想」ⁱⁱを基本とした運営がなされ、1954年には置戸町の4



写真1 中央公民館外観

つの集落ごとに公民館の本館を置く4本館8分館体制をとり、その後4本館への専任職員を配置し、社会教育振興の基盤整備を行っていた。そして1958年に中央公民館を建設し、より活発に活動を行っていくようになる。1980年の第3次社会教育5カ年計画では「生産教育」を掲げ木工教室を開き、1983年の第5回町民憲章推進大会では、内発的地域振興と社会教育による産業おこしの提言がなされた。1989年からは「おけと暮らしのデザイン広場」を開催し、「おけとらしさとは何か」を考えながら住民参加のまちづくりを行うようになった。現在は第9次社会教育5カ年計画に基づき活動が進められている。また、保健師や福祉係、社会体育と連携した「いきいきライフセミナー」や、都市の若者を地域に長期滞在させ地域に活気を生む「地遊人（じゆうじん）」制度などの取り組みも行われている。このような活動が積極的に行われていることが置戸町の特徴である。

(2) 充実した社会教育施設

置戸町社会教育から誕生した施設のひとつに図書館がある。青年読書会の活動によって図書館運営がスタートした後、1964年には農村モデル図書館に指定され、住民の誰もが利用できる図書館づくりを目指すようになった。その結果、1970年以降住民一人当たりの貸出冊数が5回日本一になっている。

その後、図書館の新館建設が始まるが、図書館建設には使用できない過疎債を利用したことにより「置戸町生涯学習情報センター」と



写真2 生涯学習情報センター(図書館)

して建設された。町の図書館条例を廃止することに反対する住民もいたが、「名前よりも実をとる」形で2005年にオープンした。現在は誰もが気軽に利用できる「本のあるみんなの広場」として、交流スペースでコンサートを行うなどの場の提供も活発に行っている。学校図書館や病院との連携も図られており、少子高齢化に対応した地域図書館としてのサービス充実に努めている。また、2010年11月には過疎の町における図書館モデルのひとつとして、置戸町の功績をたたえ、図書館総合展での特別賞を受賞している。

そして、公民館や図書館の連携で生まれたオケクラフトの発展のため、生産技術を教育する機能と、製品を販売する機能を持った社会教育機関としての森林工芸館が誕生した。ここではクラフトマンの人材養成、クラフト用材の確保、広域流通に対応する生産体制の確立が進められている。また、オケクラフトと命名した秋岡芳夫氏の仕事道具コレクションが展示されている「どま工房（置戸町山村資源保存伝習施設）」といった施設もある。

Ⅲ-Ⅱ オケクラフトの誕生経緯



写真3 オケクラフト

(1) 白い器「オケクラフト」

置戸町で作られる木工芸品を総称して、「オケクラフト」と呼んでいる。その特徴は、明るく温かみのある木肌。松は明るい木肌と美しい木目を、広葉樹はそれぞれの表情と色合いを最大限に活かしたものである。大量生産のモノには感じられない、こだわりを大切に作る職人たちの思いがこもった品々。水や汚れにも強く、油や調味料などが染みることもないため、日常的に使用できる。

(2) オケクラフトの誕生

オケクラフトは、1983年の12月に、工業デザイナーである秋岡芳夫氏（当時東北工業大学教授）が、北海道のイメージである白、エゾ松、トド松の木肌の白と、置戸を考え「白い器 オケクラフト」と名付け、オケクラフトが誕生する。

置戸町は戦後復興期の木材需要と、1954年の洞爺丸台風による風倒木処理で、1960年には、人口約13,000人を記録した。しかし、1960～70年代の農家の離農や、木材産業の構造的不況がきっかけとなり、人口が減少していく。そこで、どうにかしてこの過疎化の流れを止めたいという危機感から、地域の基幹産業であった林業と農業を見直していく。1980年になると、第3次社会教育5カ年計画が策定され、「生産教育」が掲げられる。「生産教育」が提唱されてから、内発的な地域振興、まちづくりの一方策として森林資源の活用が考えられた。

活動のはじめとして「互いに学びあう町づくり研究集会」が企画され、「木彫工芸」の著者である伊藤隆一氏（当時北海道教育大学札幌分校教授）を講師に招き、北欧の木と関わった生活のスライドや講話が行われた。同時期に、毎月18日（漢字の十と八を組み合わせると木になるため）を「木に親しむ日」として、若者を中心とし「置戸市街地青年サークル」を作り、木を使ったおもちゃ作りなどの講義や実技を、1年間の限定プログラムとして行った。また、置戸高校定時制に働きかけ、木工教室を開いた。当初、木工教室の会場として、中央公民館が使われていたが、様々な制限により、古い住宅を改造した「ぶきっちょの家」に活動の場を移した。しかし「ぶきっちょの家」には、指導者がいなかったために、木工作の資料を図書館が集め、「木と暮らし」の書架を設け、木工作の資料は図書館が提供した。

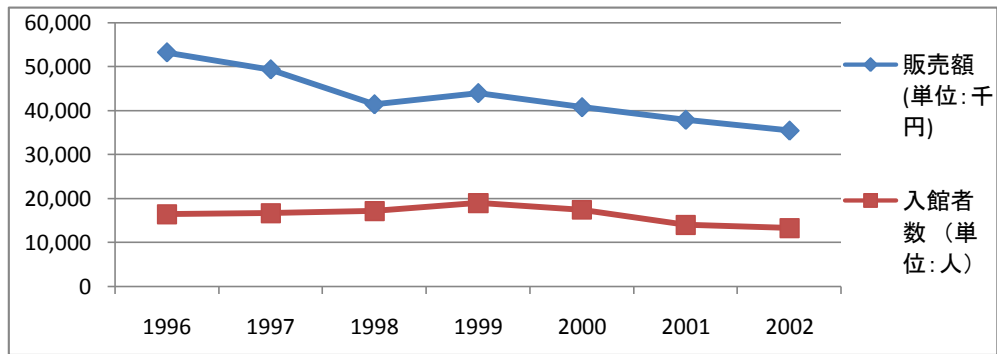
「ぶきっちょの家」の実績と活動の展開から、本格的な施設として地域産業開発センターが、1982年12月に開設される。翌年の2月に地域町民憲章推進大会の講師として秋岡芳夫氏が呼ばれる。その際、同氏から地域産業開発センターの展開として、木工ろくろの導入を提案される。しかし、置戸町には本格的な木工ろくろの技術がなかったために、同年5月に時松辰夫氏（当時東北工業大学意匠学科講師）を招き木工ろくろの技術講座を開催した。ここから本格的な木を使った工芸品づくりへと発展していく。

地場資源を見直す視点に立ち、これまで薪などにしか使用できなかったアテ材を、木工ろくろを使い器にすることで付加価値を与え、それを評価した秋岡芳夫氏が「オケクラフト」と名づけ、オケクラフトが誕生した。

下の図は、北海道公式HPから参照した、図2は、森林工芸館におけるオケクラフトの販売額と入館者数、図3は、森林工芸館が研修受け入れている研修者数の推移、図4は、置戸町内にある置戸町の工房数の推移を示したものである。

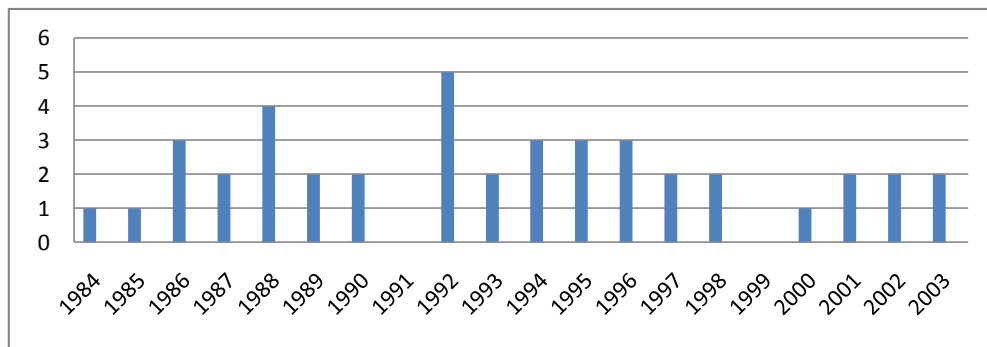
次ページにある表2は、置戸町の社会教育の動きを、主に公民館と図書館の動きと、それに対応する町の動きを、オケクラフトの誕生までに絞りあらわしたものである。

図2 オケクラフトの販売額と入館者数



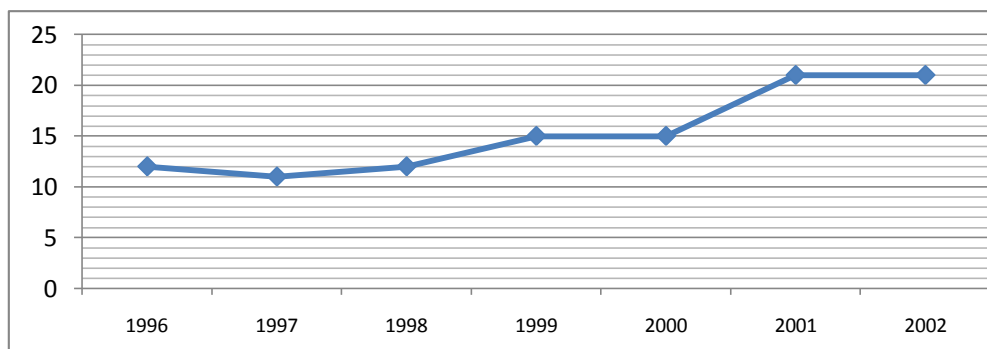
(参照 北海道公式 HP)

図3 森林工芸館の研修受付数の推移



(参照 同上)

図4 置戸町におけるオケクラフトの工房数



(参照 同上)

表2 置戸町の社会教育関連年表

年度	主な社会教育の動き	主な町の動き
1948年	置戸町公民館条例発令（12月26日）	
1951年	管内に先駆けて社会教育主事任用	
1952年	置戸町社会教育目標設定	
1953年	町立図書館、中央公民館内に設置	置戸商工会創設
1954年	置戸公民館に文部大臣全国優良公民表彰	洞爺丸台風による被害甚大
1956年	3地区に専任主事6人主事体制になる	
1958年	道社会教育モデル町の指定を受ける	
1959年	まちづくり目標設定	
1960年		人口が13,162人を記録
1965年	農村モデル図書館開館	開町50周年
1970年		過疎対策地域指定 置戸町総合計画策定委員発足
1971年	社会教育課設置 （地区公民館主事統合を前提に） 第1次社会教育5ヵ年計画策定 第1次図書館振興3ヵ年計画	第1次置戸町総合計画策定
1975年	第2次社会教育5ヵ年計画策定	
1976年	図書貸し出し率日本一になる	
1977年	図書貸し出し率日本一になる	人間ばん馬（当時バチ曳き合戦）が始まる
1978年		置戸町町民憲章制定
1979年		第1回町民憲章推進大会 清成忠雄氏により内発的地域振興と社会教育による産業おこしの提言がされる。
1980年	第3次5ヵ年計画策定 生産教育が提唱される 互いに学びあう町づくり研究集会開催	
1981年	木に親しむ日、ぶきっちょの家開設	
1982年	地区公民館に専任嘱託主事配置 置戸町地域産業振興センター開館 「木と暮らし」の書架設置	全日本綱引き選手権大会で「人間ばん馬」日本一に
1983年	時松辰夫氏による木工ろくろ教室 オケクラフト誕生	

Ⅲ-Ⅲひろがる学びの連鎖

こうして誕生したオケクラフトはあらゆる方面へと波及していく。地場資源を見直す中で過疎化する町の生き残りの可能性を見出し、オケクラフトが誕生して自信を得たことにより、町全体に活気が生まれた。

器を活かそうと無添加のハムやソーセージ、おけとワインなど様々な名産品が住民の活動から生み出された。その活動の基盤には公民館、図書館の存在があり、住民は公民館に集まったり、図書館を利用して必要な情報を収集したりすることを繰り返しながら置戸の新たな文化を生み出していった。

中でも、学校給食における活動は目覚ましく、置戸の名を全国に知らしめた。オケクラフトの誕生後、器にあった郷土料理を開発しようという試みから1984年郷土料理研究グループ「とれびあん」が結成される。活動に参加していた一人に給食センターの栄養士である佐々木十美氏がおり、「とれびあん」の目的である「世界の味覚から学ぶ」という概念を学校給食に組み入れていけないかと考えたことから置戸の学校給食が変わっていく。学校給食でオケクラフトを使ったり、食材やメニューを工夫したりして、地産地消や食育についての実践を早い時期から始め、さらに味覚開発という斬新な発想が相まって置戸独自の活動を展開していった。

活動が成果を挙げるまでに佐々木氏は図書館に足繁く通い、料理研究をしてきた。その姿を見てきた置戸町の図書館長矢崎氏はこの活動について次のように述べている。

佐々木十美さんひとりでは絶対できない。地域の中にクラフトがあって、味覚開発のグループがあって、それに地産地消・食育の流れが後ろからくっついてきたんだよね。他の町で（やる）ってなったら厳しいでしょ。様々なことが上手に絡まりあってひとつのものごとができあがっていくんでないかな。

このことから、置戸の学校給食は社会教育が住民の活動、置戸町の町づくりを支えてきた成果のひとつであるといえる。

この活気はオケクラフト周辺にとどまらず、他の資源の見直しにもつながっていった。それによって木炭生産や羊毛加工といった分野が開拓されたが、ここでも住民は公民館を活動の拠点とし、必要な情報を図書館で収集してきた。そして、その体制を整え、学びの連鎖が確立するよう社会教育が支えていた。

このように、町を見直そう、変えていこうという住民の意識とそれを支える社会教育の力が作用しあったことで、オケクラフトという町のランドマークが誕生した。そしてそれを機に、その他の社会教育活動が活発になり、住民の意識も変容するという連鎖反応がおこった。これは、「まちづくりは人づくり」という理念を基に内発的発展を目指してきた置戸町のひとつの成果であるといえる。

IV 考察

IV-I 置戸町における地域づくりと住民の学習

地域活性化の方法として、外来型開発と内発的発展がある。外来型開発とは民間企業を誘致したり、公共事業や国庫補助金を利用したりして、地域外からの力を頼りに地域振興・活性化を図っていく方法であるが、外部からの支援が無くなれば継続が難しくなる。一方、内発的発展とは地域に既存の資源、技術、産業、人材、文化、ネットワークなどのハードとソフトの資源を活用し、地域内産業連携を拡充する方法である。この方法は外部の力に頼るだけでなく、住民参加型の地域振興・活性化を可能にする（保母 1999）。

置戸町はまさに、内発的発展により、持続可能な地域づくりに成功しているといえるだろう。林業というもともと地域にあった産業を見直すことで、新たな産業である「オケクラフト」を生み出すことに成功した。木工を「学ぶ」ことで「オケクラフト」が誕生し、オケクラフトに合う料理を「学ぶ」ことで「とれびあん」が結成され、更には、学校給食にも影響を与えていった。また、町内の小学校で、木工教室が開かれることで、「児童が、道端に落ちている木の枝に、価値を見つけるようになった。」という。「住民の学び」が連鎖していったことで、地域活性化につながっていったのである。

この置戸町における内発的発展を可能にしたのは、社会教育の力が大きいといえるだろう。もし、町が生産教育に注目し、社会教育を行っていなければ、オケクラフトが生まれることはなかっただろう。今まで述べてきたように、置戸町社会教育は古くから活発であった。特に公民館は、社会教育法制定以前に設置され、住民に「話し合いや活動の場」「学びの場」を提供してきた。そこから、置戸青年読書会や婦人会の活動など多くの住民活動が生まれ、住民の社会教育に対する意識を高めてきたといえる。町が生産教育という新しい取り組みを打ち出したことに対して、抵抗なく住民が取り組むことが出来たのは、長年に渡って社会教育が行われてきたからである。

内発的発展には、キーパーソン（自ら創造的苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身に引き受ける人間）が重要である。オケクラフトの誕生に初期段階から関わっている片岡氏は、木工ろくろを使い器ができるのを初めて見た時「魔法を見ているようだった。」と述べている。このように、公民館が中心となり様々な講演会や実践を行うことで、住民に感動、刺激を与え「やってみよう」という意欲を引き出した。また、行政も内発的発展を支えた。「まちづくりは人づくり」を理念に、社会教育に対して資金面での支援を行った。組織や取り組みといったソフトな面だけでなく過疎債を有効に使い無理のない計画を立て公民館や図書館、どま工房といった社会教育施設の整備などハードな面でも社会教育を支援してきた。

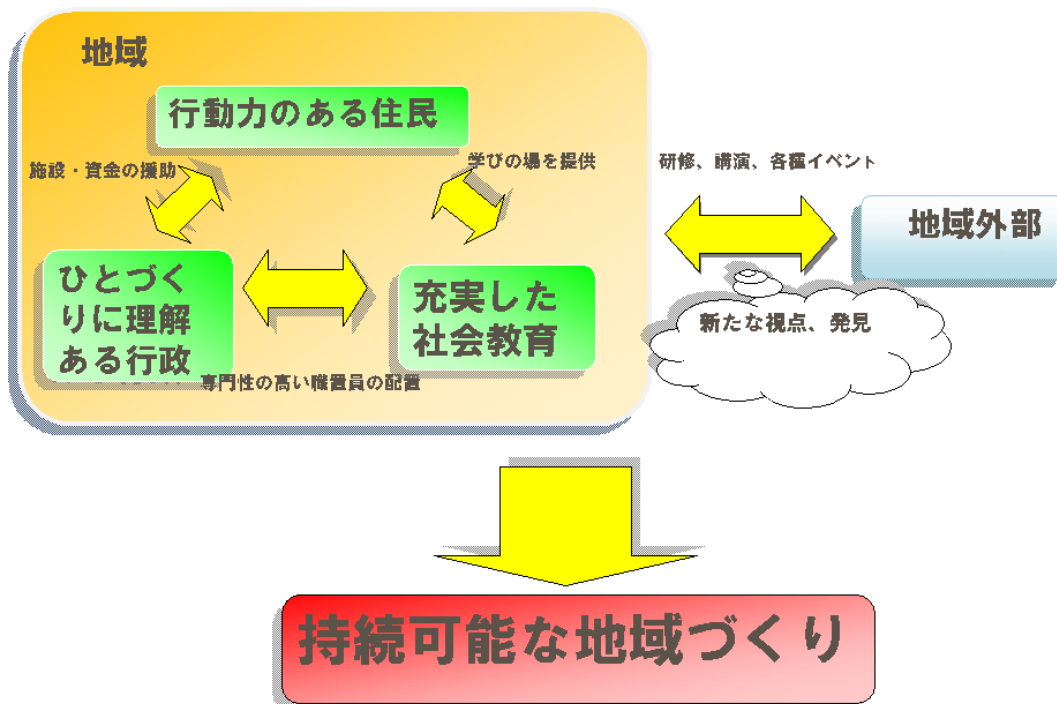
このように、公民館が「住民に学び」の場を提供し、行政が「住民の学び」に対して支援していったことで、内発的な発展につながり、持続可能な地域づくりにつながっていったと考えられる。

IV-II 提言

内発的発展による地域づくりは、過疎化や高齢化が進行している道内の各地域でも適用が可能であると考えられる。その際にまず、重要となるのは「人づくり」である。置戸町が行ってきたように、まずは、社会教育を通じて住民が、地域に存在する技術、産業、人材、文化、ネットワークなどの資源を学び直すことが大切である。そうすることで住民の学習が生まれ、そこから新たな地域の特産物が生まれる。それを基点にまた、新たな学習が生まれていく。こうした学びの連鎖により「人づくり」が行われ、それが持続可能な地域づくりを可能にするのである。

その際に重要となるのは、社会教育施設に専門性の高い人材を配置することである。ここでいう専門性とは、これからの時代のトレンドを嗅ぎとる嗅覚と想像力を基に、住民の学習を組織する力量のことである。かつて、置戸町は各公民館に社会教育主事を配置し、住民の細かいニーズに対応し、住民活動を盛り上げた。そのように、高等教育で社会教育について学んだ人や他の地域で実績のある人を行政が任用したりすることで、内部から地域を盛り上げる必要がある。

もう一方で大切になるのは、外部とのつながりである。住民や社会教育主事に研修の場面を設け、外部の人間、資源に触れさせることで、外部とのつながりを生む。そうして、外部のものや人、発想との出会いに刺激を受けたことが、住民の学習を援助するには不可欠である。



-
- i 「広義では、現代の生産技術と労働を人間形成の中核とする教育をさすが、狭義では、一般に、普通教育における、生産技術と労働の教育を意味する。」(『教育事典 第3版 小学館』) ここでは前者となる、1950年ごろ、宮原誠一によって提唱される。
 - ii 1946年、当時文部省公民教育課長であった寺中作雄によって創案された、公民館に対する基本的な考えかた。産業振興、地域復興の拠点施設としての役割や機能を、公民館に期待している。

参考文献

- 井上久男 2005『林野時報 2005.5』林野時報
- 置戸町社会教育 50 年の歩み編集委員会 2000『置戸町社会教育 50 年のあゆみ』置戸町教育委員会
- 置戸町・置戸町教育委員会 2009『写真集 置戸町公民館 60 年のあゆみ～写真が語る人づくり・まちづくりの歴史～』置戸町教育委員会
- 置戸町教育委員会 2010『置戸町第 9 次社会教育 5 カ年計画 (2010～2014)』置戸町教育委員会
- 岸田純一 1989『みんなの図書館 1989 年 5 月号』図書館問題研究会
- 小林文人編 1999『これからの公民館 新しい時代への挑戦』国土社
- 島田修一・辻浩編著 2008『自治体の自立と社会教育－住民と職員の学びが拓くもの』ミネルヴァ書房
- 鶴見和子・川田侃編 1990 (第 4 刷)『内発的発展論』東京大学出版会 (初版 1989)
- 鶴見和子 1996『内発的発展論の展開』筑摩書房
- 鶴見和子 1999『コレクション 鶴見和子曼荼羅IX 環の巻－内発的発展論によるパラダイムの転換』
- 寺中作雄 1997 第 2 刷『〈現代教育 101 選〉55 社会教育法解説 公民館の建設』国土社 (初版 1995)
- 北海道町村会企画調整部宮原誠一 1952「生産教育の概念」『教育』国土社 (『宮原誠一教育論集』第 1 集、1976 年、国土社)
- 保母武彦 1997 (第 4 刷)『内発的発展論と日本の農山村』岩波書店 (初版 1996)
- 保母武彦 1999『地方自治体土曜講座ブックレット No. 30 内発的発展による地域産業の振興』
- 宮原誠一 1956「生産教育の意義」、宮原誠一編『生産教育』、国土社 (『宮原誠一教育論集』第 1 集、1976 年、国土社)
- 文部科学省生涯学習政策社会教育課 『公民館』文部科学省生涯学習政策社会教育課矢崎秀人 2008『開発こうほう ‘08.3 マルシェノルド ～置戸から始まった北見地域の図書館づくり～地域一体となって取り組む図書館運営』開発こうほう
- 矢崎秀人 2009『1950 年代における置戸町社会教育：置戸町の初期公民館』
- 山田定市・鈴木敏正編何年 『地域障害学習の計画化〈上〉 地域づくりと自己教育活動』筑波書房